

東京七座会

2019年春号 (No.16)

花吹雪から葉桜となり、晩春の愁い感じる季節になりましたが、会員の皆様にはお変わりなく、お健やかに暮らしのことと存じます。

平成30年のふるさと会は、記念となる第30回東京七座会を6月17日に銀座博品館ビル6階イタリアン料理『オリゴ』で開催しました。14名の参加ですが44年組の同級生5名が郷里から駆け付けてくれました。事前に上京してた1人に前日の早朝に車で2人が出発し盛岡で1人乗せ、さらに当日に秋田市から新幹線利用して1名の参加です。65歳となった同級会では、部落のことやワラシッこ時代の話に「故郷に思いを寄せる」ひと時となりました。

他方、第31回東京鷹楽会は10月14日に九段下『ホテルグランドパレス』で総勢170名の参加がありました。昨年に制定した会歌斉唱で始まり、伊勢堂岱遺跡の世界遺産への登録応援へと続きました。その後の鷹楽阿仁青年会議所の皆さんの「現在の鷹楽」を画像や動画の紹介には、鷹楽のマチ(街)の人通りの少なさに唖然とした次第です。当会からは、残念ながら7名の少数出席でした。

※会員の動向については、退会4名により103名(他に住所不明10名)の会員数となっております。

退会者

25戸澤吉郎(都合) 28簾内イナ(都合) 29佐藤トシ(死亡) 32戸澤憲三(死亡)

亡くなられた方のご冥福をお祈り致します。(合掌)



第30回東京七座会



第31回東京鷹楽会 津谷市長が七座会テーブルに寄ってくれました。

ポンジャ(坊沢会)と一緒に集合写真です。



七座のあれこれ

【簾内家】小笠原家の家紋である三階菱は、「王」の文字を図案化したという俗説があるが、その三階菱を裏返しにして家紋に採用したのが簾内家である。今泉の簾内家は、麻生の簾内甚之丞の分かれである。茂三郎は麻生の吉右エ門の別家で宝暦3年(1753)に移住し、その子の茂右エ門は天明2年(1782)から23年間、村の肝煎を勤めた。幕末の頃に藩の御山守に任命された茂平治は茂三郎の別家である。治兵衛は麻生の重兵衛の分かれで、喜平治は小堤の水利権を持った旧家である。

【浪岡家】今泉に浪岡姓は一軒も見当たらないが、延宝年間(1673~1681)に浪岡助左エ門という長百姓が住んでいて別家も多かったことが成田家の記録にある。中岱の「助左エ門堤」と同家の関係は不明である。

【熊谷家】元々、浪岡という苗字を名乗っていた。津軽浪岡(現青森市・旧浪岡町)からきて野呂重左エ門に草鞋(ワラジ)を脱いだ。宝永4年(1707)の大洪水の際、古前山村が旧地を捨てて現在地へ移転した五家の内の一家である。下(シモ)の堤(熊谷堤)を築いて開田した。津軽浪岡の北畠氏の流れを汲む移住者である。

【畠山東右エ門家】前山村の支郷・二本杉の観音堂の別当をしていたことがあり、坊沢の嶺脇家や仁鮒(ニツ井)の畠山家と同姓同族だという伝がある。

【石川家】幕末期に前山の石川道賢といえば、鷹楽の神成元恭とともに地方では名の知れた漢方医であった。俳句を嗜み、号を「芙蓉亭」または「一山」といった。前山墓地の墓石に「一山院釈道賢定位」と刻んであることから一向宗であった。寺子屋を経営し村内の子弟に読み書きを教えて、明治十年代まで開墾した。没年ははっきりしないが、少なくとも77歳以上の長寿を保った人である。

【伯楽】前山の藤田熊助は、昔の馬の医者(伯楽)を生業としていた。農閑期に七座地区の馬の飼育農家を訪ねては、太い針を馬の口中に刺して悪血を取ったり(ネラという唾液の出過ぎる病気予防)、蹄の延びたところを削り取る強健法を施し村々を巡回した。農家では米一升ぐらいを謝礼として差し出した。

前山の昔話<闇夜のカラス>

むかし、前山さ、上方から来た絵かきど、江戸がら来た絵かきどが泊った。◇前山に、上方から来た絵描きと江戸から来た絵描きが泊まった。宿屋の息子は、俺も絵描きだと言ってしまふ。翌日絵を比べることになり、息子は紙に墨を塗り重ねておいた。江戸の絵描きは立派な鶏の絵を描いてきたが、鶏冠が前山の鶏より貧弱だから駄目だということにした。上方の絵描きは蜜柑を描いてきたが、庭になった柿よりまずそうだと駄目にした。息子は、夜中にカラスが飛んできたのを描いたと言って一等になった。◇どっとはれ。

前山からニツ井に嫁いだ故伊藤ミヤさんの話ッコです。



<後記>昔話の伊藤ミヤは、郷土史研究家の伊藤徳治の母親です。徳治氏は元仁鮒小教諭でニツ井の歴史に学ぶ会事務局長を務め、ニツ井地域に残る江戸・明治期の文化財や戊辰戦争の記録を長年にわたり調査しています。2018-12-28に88歳で死去。(熊谷忠憲)